映画はボーダレス

娘が想う父との日々

中野 理恵

©2021 VOCO Products, LLC

本作の主役ジョン・ヴォーゲルを演じるショーン・ペンは芸達者だ。それが役者の本分だと言われればそれまでだが、それにしてもうまい。『デッドマン・ウォーキング』（1995年）での死刑囚マシュー・ポンスレット、同性愛者を始めとした米国における少数者のために闘った市民運動の活動家ハーヴェイ・ミルクを演じた『ミルク』（2008年）。いずれも実在の人物だが、対照的なふたりを見事に演じきり、『ミルク』では2度目のアカデミー賞主演男優賞を授与されている。

実話に基づいて製作された本作『フラッグ・デイ 父を想う日』では、ひとり娘を目の中に入れても痛くないほど可愛がる子煩悩な父親にして、実は、2,200万ドルという全米史上最大規模の贋札づくりの実行犯ジョン・ヴォーゲルをみごとに演じている。そればかりか本作では、娘のジェニファー役はペンの実娘のディラン・ペン、息子のニック役は実息子のホッパー・ペンが演じ、ペン一家総出演の力の入れようである。

1975年夏、ジェニファーが母と弟ニックと3人で暮らしているところに現れた父ジョンは、農場を購入し家を修理、4人での暮らしを始めたのだが、それは僅かの間だった。というのは、農場の購入資金は返す当てのない借金だったのである。すると立場を失ったジョンはまたしても忽然と姿を消してしまう。実はジョンは、しょっちゅう、家族の許からいなくなっていたのだった。すると、酒に救いを求めた母親は荒んだ暮らしに陥ってしまう。見かねた伯父のベックが、ジョンが若い愛人と暮らす家にニックとジェニファーを連れて行く。ジョンは大歓迎で、毎日はお祭り騒ぎのように過ぎて行ったのだが、実は相変わらずの借金暮らしだったのである。ほどなくして、ふたりは母親の許に帰されることになった。

米国の国旗制定日6月14日が誕生日のジョンは、自分は生まれながらにして祝福された特別な存在なのだ、何をしても許されると信じていたのだが、またしても息子が孫を不幸に陥れたのを知った祖母は、「〈フラッグ・デイ〉に生まれた男性はクズだ」と息子をなじるのだった。

1981年、高校生になったジェニファーは母親の再婚相手とそりが合わず、弟を残しひとりで家を出て父ジョンの許に行く。相変わらずの暮らしをしていたジョンは、それでも娘のために、まともなセールスの職を得て働き始めた。そして迎えた〈フラッグ・デイ〉。メッセージが添えられたジェニファーからのプレゼントに、ジョンは涙を流して喜んだのだった。だが、それも束の間、ジョンは習得した印刷技術で贋札づくりに走っていたのだった…。

本作の原作は、ジョン・ヴォーゲルの実娘にしてジャーナリストのジェニファーが執筆したと知るとき、驚くと同時に、ジェニファーの自伝を読みたい、と思うのは、私だけではないだろう。

《Cinema Information》

『フラッグ・デイ 父を想う日』

アメリカ映画（112分）／監督：ショーン・ペン／12月23日（金）よりTOHOシネマズ シャンテほか全国順次公開

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。（株）パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』（現代書館, 2018）等。